

うちなあ点描
●第百三十五回

歴史的建造物を技術で支える人々

文と写真・平良啓 Hiromu Taira

歴史的建造物の復元・修理を行うにあたって、製作・工事を担っている伝統職人について述べてみたい。

●最近の状況と課題

沖縄県内で建造物の伝統的技術を継承することについて、私はそれほど悲観していない。というのも、多少の課題はありつつも、職人が着実に育っていると感じるからである。

工事ごとに考えてみよう。まず、石工事については、城壁や基壇などの石積みは以前から県内の職人が担ってきた。現在、石の加工や運搬、設置などは主に機械を使用しているために、昔の石積みの雰囲気は再現が期待しにくい。伝統的工法の再現は可能なので問題はない。

石彫刻には往時から優れた作品がある。首里城正殿の大龍柱と小龍柱、円覚寺放生橋欄干、玉陵の石獅子、浦添ようどの石棺などがある。今日でも、製作道具の充実を追い風にして石彫刻の職人は育っている。首里城正殿の大龍柱と小龍柱、向拝柱礎盤の蓮の彫刻、石高欄など、復元された彫刻物を見てほしい。現代職人の意気込みとレベルの高さが実感される。

散発的ではあるが、木造建築物の復元・修理工事は行われている。ベテラン、中堅、新人の大工が関わっており、伝統的技術の継承の流れは多少見えてきた。古民家を調査すると珍しい継手・仕口を発見することがある。木造技術は奥が深く、今後とも技術の研鑽を図る必要がある。木彫刻については、高いレベルの彫刻師を中心に、さらに若手の育成が望まれる。

県内には瓦工場が数カ所あり、主に赤瓦を生産している。ただし、これらはプレス機械による製作であり、かつての手作り瓦を製作できる職人は数人もいない状況である。文化財建造物の屋根瓦の修理や往時の工法で復元される建物の屋根には、手作り瓦がふさわしい。この伝統的技術は代々継承したいものである。

屋根瓦の漆喰塗りを担う職人は充実している。平瓦と丸瓦で構成される本瓦葺きの場合、丸瓦の目地と棟積みには漆喰処理を施すことになる。ただし、最も過酷な自然条件下にあるので、漆喰は十数年で補修しなければならぬ。実は、このことが連綿と技術が継承される要因でもあるといえる。建物への伝統的塗装につ

いては、最近、首里城では県内の若手の漆芸家を中心に建物を伝統的手法で改修・復元している。建物の塗りは県内の職人で対応できることが示された。木製建具や琉球畳についても問題は少ない。

対応が難しいのは、建物の飾り金具などの金工分野である。県内では需要がほとんどないため、職業として成立しにくい。いずれは、本格的な建築装飾物も県内で製作できたらうれしい。

なお、伝統的技術も常に進歩するものであり、これまで本土の職人から得た技術を大切に、さらにお互いの交流を続けることが大切と思う。

これまでの一年間、拙稿を読んでいただきありがとうございます。また、原稿を作成するにあたってご理解・ご協力いただいた方々に感謝いたします。



首里城正殿の屋根漆喰の補修工事と外壁塗装の塗り直し工事